

「ヤコブの子どもたち」

2021年03月31日

主はレアが疎んじられているのを見て、その胎を開かれた。一方、ラケルは不妊であった。(創世記 29 章 31 節)

ヤコブは姉レアと妹ラケルの姉妹を妻にした。ちなみに、レビ記 18 章 18 節には、「妻の存命中に、彼女に加えて、その姉妹をめとり、これを犯してはならない」と、妻の姉妹との結婚は禁じている。ヤコブはラケルを愛した。神は疎んじられたレアを顧み、胎を開かれた。神は悲しむ者に愛を注がれるのである。彼女は身ごもり、男児を産み、「主は私の苦しみを顧みてくださった。これで夫も私を愛してくれるでしょう」と言って、「ルベン」と名付けた。彼女はまた身ごもって男児を産み、「主は私が疎んじられていることをお聞きになり、さらにこの子を授けてくださった」と言って、「シメオン」と名付けた。彼女はまた身ごもり、男児を産み、「今度こそ、夫は私に固く結びついてくれるでしょう。私は三人の男の子を産んだのですから」と言って、「レビ」と名付けた。彼女はまた身ごもり、男児を産んで、「今度は、私は主をほめたたえます」と言って、「ユダ」と名付けた。その後、彼女は子どもを産まなくなった。

ラケルは不妊であった。彼女は子どもを産むレアを妬み、ヤコブに、「私に子どもをください。さもないと、私は死にます」と言った。夫から愛されていることは喜びであったが、子どもが産めないことは耐え難い屈辱であった。ヤコブは激しく怒り、「私が神に代わられるというのか。あなたの胎に子を宿らせないのは神なのだ」と言った。そこでラケルは、「私には召し使いのビルハがいます。彼女のところに入ってください。彼女が私の膝の上に子どもを産めば、私は彼女によって子どもを持つことができるでしょう」と言った。ヤコブは、差し出された召し使いのビルハのところに入った。ビルハは身ごもって、男児を産んだ。ラケルは、「神は公平に私を扱い、私の願いも聞き入れて、男の子を授けてくださった」と言って、「ダン」と名付けた。ビルハはまた身ごもり、二人目の男児を産んだ。ラケルは、「私は姉と激しく闘い、打ち勝ったのです」と言って、「ナフタリ」と名付けた。

レアは、子どもができなくなったことが分かると、ラケルの向こうを張って、召し使いのジルパをヤコブに差し出した。ジルパは身ごもり、男児を産んだ。レアは、「幸いなこと」と言って、「ガド」と名付けた。ジルパは二人目の男児を産んだ。レアは、「幸せなこと。女たちは私を幸せな者と呼ぶでしょう」と言って、「アシェル」と名付けた。ヤコブは、レアと二人の召し使いによって、八人の男の子をもうけた。

レアは夫ヤコブの愛を、ラケルはヤコブと自分との子どもを得たいと、意地をかけて闘った。姉妹の父ラバンは、裕福になりたいがために、ヤコブを長く引きとどめ、働かせようと、娘たちを嫁がせた。父の道具にされた訳である。また、二人の召し使いビルハもジルパも、女主人の言いなりにならざるを得なかった。まさに奴隷で、彼女たちの声、意思は全く記されていない。しかし、姉妹は、強い意志を持ち、夫の愛を得ようと必死の闘いをする人間として描かれている。人権が無視されても、人はどんな境遇にあっても自分を表現するのである。一方ヤコブは、二人の召し使いを受け入れることを当たり前としている。当時、力ある人にとって、一夫多妻は当然のことであった。ヤコブは子どもを沢山持つことによって、勢力の誇示ができると思ったのである。これから、姉妹の闘いはまだ続いていく。